

電車の中

松井 とし

電車の中で、嬉しさにはほがひとりでにゆるんで困ったことがある。その朝は月曜日。

何となく身支度に時間がかかってしまい、いつもの電車より大分遅れた。駅まで走り続け、改札口横の電話にとびついた。受話器のむこうで若い先生の弾んだ声。

「びっくりするいいことがありますよ。早く来てください。」

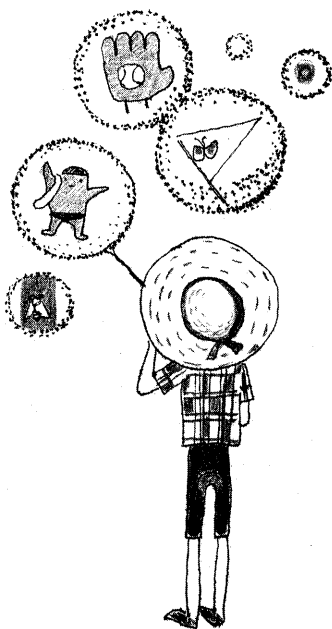
「なあに、どうしたの？」

「あのね、あのね、うさぎの赤ちゃんがね……」

「やっぱり穴の中で生まれていたの？」

つり皮につかまり、眼では秋晴れの空を見ながら、頭の中ではいろいろな想いが駆けめぐっていた。そして、気がつくと何度も私は一人で笑っていた。

母うさぎのルンルンが私のもとへ来たのは、ちょうど一年前の秋。手のひらにのる程の



大ききだった。ゴマのような黒いちいさなフンが日増しに大きくなり、黒豆になったとき、ルンルンはすっかり馴れ、自分の名前を覚え、放し飼いができるようになっていた。やがて、うさぎのピーターがお婿入り。二人で散歩する姿は『のみの夫婦』を絵に描いたようではええましかった。

秋になって、ルンルンが花壇の『竜のひげ』を口いっぱいにくわえては、職員室の下に掘った穴の中へかけこむ姿が眼につくようになった。動物園へ問い合わせ、指示された通りに産室を作ったが、肝心のルンルンは、ただただ外へ出たがるばかり。一向にその気配は見られず、私たちは期待はずれだったと、とうにあきらめていたのだった。

それにしても、小さな命はどのように守られていたのだろうか。冷たい雨の日もあったし、母親のおっぱいをもらえない日曜日もあった。愚かな人間の知恵を越えて生き続けた子うさぎの生命力に、畏敬の念を抱いた。

あれから四年。なくことさえない、小さな存在のうさぎが、静かに私たちに語りかけるもの、それは生きるもの同士の共感。うさぎたちのいるくらしは、日々、真実に満ちている。

(神奈川県立教育センター)